

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

## ダークタワー

2017年/アメリカ映画

配給：ソニー・ピクチャーズエンタテインメント/95分

2018 (平成30) 年1月27日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

### Data

監督・脚本：ニコライ・アーセル  
原作：スティーヴン・キング『ダーク・タワー』

出演：イドリス・エルバ/マシュー・マコノヒー/トム・テイラー/キム・スヒョン/フラン・克蘭ツ/アビー・リー/ジャッキー・アール・ヘイリー/デニス・ヘイスバート/キャサリン・ウィニック

## ■ショートコメント■

◆公式ホームページによると、本作の「イントロダクション」は次のとおりだ。

代表的小説の映画化『IT/イット “それ”が見えたら、終わり』の世界的な大ヒットにより、新たな黄金時代を迎えているモダンホラーの帝王スティーヴン・キング。ベストセラーを連発し、多くの映画化作品を世に送り出してきた彼の著作の中でも、マスターピースにして原点と言われている小説がある。『ダークタワー』——それはキングが大学時代から構想を温め、第一巻の発刊から22年を費やして完結させた、全7部からなる超大作。その壮大な世界観をビジュアル化したのが、映画『ダークタワー』である。

『キャリア』『シャイニング』のようなホラーから、『スタンド・バイ・ミー』『ショーシャンクの空に』などの感動作に至るまで、キング原作の映画は観客を魅了してきたが、本作はそのどれとも異なる。

世界の平和を保つ塔＝ダークタワーを守る使命を負った戦士<ガンズリンガー>と、塔を破壊しようとする強大な力を持った<黒衣の男>の間で繰り広げられるバトルは、現実世界、それとは別次元に存在する“中間世界”という2つの世界を股にかけ、熾烈としか言いようのない迫力で迫ってくる。銃弾が次々と放たれてはリロードされる高速ガンファイト、アクロバティックな立ち回り、そしてディストピアの衝撃的な風景。これはまさにキング映画初の本格派アクション大作なのだ。

孤高のアウトロー、ガンズリンガーにふんずけるのは、『マイティ・ソー』シリーズ等のマーベル・ユニバース作品で広く知られるイドリス・エルバ。一度は使命に背を向けながらも、絶望を乗り越えて戦いに向かう男の静かなる闘志を、エキサイティングなスタントとともに体现。一方の強敵、黒衣の男役には『ダラス・バイヤーズクラブ』でアカデミー賞主演男優賞に輝いたマシュー・マコノヒー。時空を超えてあらゆる命を瞬時に奪い去る恐

ろしい魔術師だが、そんなキャラクターにカリスマ性を与え、絶対的な悪をつくりだした。

監督は『ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女』の脚本で世界的な注目を集めたデンマークの俊英ニコライ・アーセル。映像化不可能と言われた次元を超えるストーリーを鮮やかにまとめ上げながら、手に汗握るスペクタクルを活写して才腕を見せつける。

◆公式ホームページによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

ニューヨーク。少年ジェイクは毎夜同じ夢にうなされていた。“巨大なタワー”“拳銃使いの戦士”そして“魔術を操る黒衣の男”…

ある日、この現実世界と夢で見た《中間世界》と呼ばれる異界が時空を超えて繋がっている場所を発見する。すべては実在したのだ――。

中間世界に導かれたジェイクは、そこで拳銃使い<ガンスリンガー>に出会う。彼は 2 つの世界のバランスを保つ塔＝ダークタワーの最後の守護者であり、タワーの破壊を目論む<黒衣の男>を倒すため旅を続けていた。

一方、ジェイクこそが唯一タワーを破壊できる特殊能力を秘めた存在であることに気づいた黒衣の男は、その強大なパワーを求め、ジェイクたちの前に立ちはだかるが――。

◆スティヴンキングの「原点と言われている小説」が原作と聞き、これは必見！そう思ったが、完全に期待はずれ。全7部からなる超大作は、<現実世界>と<中間世界>という時空を超えて繋がっている世界を前提とした、かなり複雑な物語らしい。また、本作で敵対する2人のキャラクターは、拳銃使いの戦士ローランド（イドリス・エルバ）と魔術を操る黒衣の男ウォルター（マシュー・マコノヒー）。そして、その中間に位置して本作の主人公になるのが、少年ジェイク（トム・テイラー）だ。しかし、そもそも95分の映像でそんな壮大な世界観を理解させるのは至難の技では？

◆したがって、ジェイクが夢にうなされながら見る、巨大なタワーが攻撃されている冒頭のシーンからして、私にはほぼ理解不可能。そして、その後のストーリー展開も・・・？キアヌ・リーブス主演の『マトリックス』（99年）は大きな反響を呼び、大人気になったが、私は最初に観た時からそれにも違和感があったし、あまり好きにはなれなかった。そんな私だから、なおさら本作のような映画はイマイチ・・・。

◆近時『ジョン・ウィック』（14年）（『シネマルーム37』77頁参照）や、『ジョン・ウィック2』（17年）のキアヌ・リーブスが魅せる「ガン・フー」と呼ばれるカンフーや空手などの武術と銃撃を融合させたアクションが注目されているが、本作で拳銃使いの戦士ローランドが見せるガンアクションは如何に・・・？他方、『ダラスバイヤーズクラブ』

(13年)『シネマルーム32』21頁参照)で第86回アカデミー主演男優賞に輝く個性的な演技を見せたマシュー・マコノヒーは、本作ではかなり無理のあるアクション(?)を見せている。ちなみに、こんな強力な力を持った闘の世界の男でも、負ける時には負けるのは仕方がないが、そのマシュー・マコノヒーの力が敗れる時のアクションは、ある意味では、なるほど、なるほど……。しかし、それはあくまでマンガ的面白さであって、映画の出来としては、さて……?

2018(平成29)年1月31日記